

占領下の地方における性と生殖の啓蒙的言説

—性教育専門誌『めざめ』について

下田太郎

本論は、占領期における性と生殖をめぐる言説について、栃木県公衆保健協会性病予防部会発行による性教育雑誌『めざめ』(1949 [昭和 24] 年 1 月創刊) をテキストに言説の分析を試みた。分析に際し、『めざめ』創刊号から 1949 年 9 月発行の第 3 集に掲載されていた記事を 6 つの言説群に分類した。また当時の性に関する言説に対する女学生や教師たちへの影響について、同誌に収録されている 2 つの座談会を例に検証した。その結果、正しい性生活を営むためには、純潔と愛情という紐帯で結ばれた男女が専門家の指導の下、これまでの生活を改善し、正しくかつ合理的に性教育を学び実践する必要がある、という啓蒙的言説に覆われていることを明らかにした。こうした言説の背景には、「無知で不安な人びと」(＝想定読者) と「知識を伝道する人」(＝啓蒙する側) との共存関係があったと考えられる。『めざめ』の果たした役割が、後の県主導による「家族計画」に影響を与えていたことも併せて指摘した。

Enlightening Discourse on Sex and Procreation in Tochigi under the Allied Occupation —On Sex Educational Magazine, “Mezame”—

SHIMODA Taro

This paper investigates a sex educational magazine “Mezame”, which was first published in January 1949 by Section of the Venereal Disease Prevention of Tochigi Prefecture Public Health Association. I also analyzed how “Mezame” discusses sex and procreation. Moreover, I classify these technical articles under six discourse groups. As a conclusion, I argue that these discourses implied that in order to live an ideal sex life, it is necessary that a man and a woman bound by purity and love, learn and practice sex education appropriately and rationally. Thus, I view “Mezame” as an enlightening medium.